

実践記録・中学校

## 障害児学級の戦争学習について

—「ランドセルをしょったじぞうさん」をきっかけに  
「戦争中の生活」を考える—

山下 洋見

ここで取り上げる実践は、昨年度まで勤務していた八王子市立松が谷中学校障害児学級（知的発達障害学級）でのものである。生徒は一〜三年生の一名。担任は三名。どの生徒もことばでのコミュニケーションは可能であるが、自分の目の前にない物や事について考えるような認識の力には、かなりの幅がある。ただそういうなかで、どの教科でも（うまくいったかどうかは別にして）みんな得意を出し合って考えていく、ということを中心にしてきた学級である。

### 一、障害児学級での社会科

障害児学級は各都道府県によっても状況が大きく異なるし、また「特別の教育課程を編成することができる」ので、社会

科が時間割にない学校もある。そこであくまでも私の考えている「障害児学級での社会科」について少し述べたい（社会科が専門でない自分が、ともかくにも社会科の授業を試行錯誤しながらつくってきて、ある程度の考え方をまとめたというものである）。

まず、大きなねらいとして、生徒たちに「自分はこの社会のなかに生きている一人の人間なんだ」と意識してもらいたいということがある。障害を持つ生徒たちに、生活の主体者、人生の主人公として生きていってほしいと考える時、自分の周りの世界、自分とつながる世界をいろいろな視点から見ると、力をつけてほしい、と考えている。そのためには、障害児学級でも、国語や数学、あるいは生活経験からだけでなく、社会科や理科という教科からのアプローチも必要だと思ふ。

では、具体的にどう授業をつくっていくかとなると、障害児学級（以下、ここでは知的発達障害学級）では、どの教科でも一つのことを学ぶのに非常に多くの時間がかかる。そこで社会科では、大まかに一学期に地理的な学習、二学期から三学期にかけて歴史にかかわる学習と「選挙」や「労働」というような社会の仕組みにかかわる学習、また年間を通して自分の周りや、新聞・テレビで見たニュースの発表、というような流れをつくり、その時の学級の実態（生徒の障害の様子等）によって内容を考える、という形で授業を行ってきた。

### 二、「戦争中の生活」の授業

#### (1) なぜ、この単元を取り上げたか？

昨年度、戦後五〇年ということでマスコミでも戦後五〇年に関する様々な報道がなされていた。学級では、社会科の時間に毎回ニュースの発表を行っていたが、生徒たちがその種のニュースを発表することはほとんどなかった。そんな生徒たちにも何らかの形で五〇年前にどんなことがあったのかを伝え考えさせたい、自分と関係ない出来事ではないんだと考えてもらいたい、と考えていた。そしてその戦後五〇年の年に、私自身が夏休みに初めて沖繩を訪れた（歴教協の全国大会）。沖繩の戦跡を訪ね、沖繩戦の実態を少しが学ぶなかで、やはり生徒たちに「いのちの大切さ」「平和の尊さ」「戦

争のむなしさ」といったものを、どうしても伝えなければならぬ、と考えるようになった。

では、具体的にどのような視点から授業を組んでいくか、と迷っていた時、『ランドセルをしょったじぞうさん』（古世子著、新日本出版社）という児童文学に出合った。これは戦時中、品川から八王子に学童疎開に来ていた小学生（国民学校四年生）が、機銃掃射で命を落とし、その母親がその子のランドセルを、近くのお寺の地蔵堂の息子に似ている地蔵に背負わせた、という実話をもとに書かれた作品である。

この作品を国語の時間に読みながら、学童疎開の生活についてであれば、自分たちの今の生活と重ねながら考えていくのではないかと考えた。そのうえで、戦争中の生活の不可思議さ、戦争のむなしさ等を感じ、平和の大切さを自分たちなりに理解してくればと考えた。

#### (2) 「ランドセルをしょったじぞうさん」で学習の導入

まず、国語で最初の時間、『ランドセル……』の表紙を見せ題名を読むと、「えーっ、何でお地蔵さんがランドセルしょってんの？」「ふつうエプロンみたいなものしてるでしょ。」「帽子かぶって……。」と次々に発言。「だけど本当にいるんだって。」「本当？」「さあどこにあるんでしょうねえ。」と言って読んでいくと、「……去年の夏、ケンジたちは先生につれられて 八王子のこの村へ来た。……。」というところから、たところ、「えっ？」という反応。本のなかに自分たちの

住んでいる八王子が出てきたこと、そこにどうも変わったお地蔵さんがあるということに、生徒たちはかなり興味を引かれた様子で、「お寺が学校だったのかなあ?」「八王子のこの村ってどこだったんだろう?」という発言も出た。「そういうことを社会科で少しずつ調べていこうね。」という形で、非常にスムーズにこの単元に入っていた。

### (3) 主な学習経過

(丸で囲んだ数字はこの単元の時間数。ただし、毎回ニュースの発表を行っていて、それに時間がかかることもあり、五〇分フルに単元の内容を学習しているわけではない。T…教師 S…生徒)

#### 〈写真やビデオを見て考える〉

学級には、ことばの説明だけでは皆目見当がつかないという生徒もいるし、かなりわかる生徒でも視覚に訴えることで理解が深まるということもあり、多くの場面で写真やビデオを見せて考えさせる、という学習方法をとった。

①二月八日 夜の空襲等の写真を見せ、T「これ何だと思っただろう?」S「雨、台風、雷、火事、花火」等の意見が多く、一人だけ「戦争の爆撃」と言う。

②一月一三日 前時の写真だけでは、想像がつかないようだったので『火垂るの墓』のビデオの空襲場面を見る。

S「アメリカの飛行機は爆弾を落とした後、アメリカに帰るのかなあ。どうするのかなあ。」「アメリカまで帰るって遠

いよ。」「日本に基地があってそこに帰るの。」「基地があるんだったら、爆弾落とす必要ないじゃん。」「沖繩にも基地があるよ。」等々。

③一月一四日 前回の疑問に対して、B29の行動半径と東京―テニアン間の距離を、毛糸と直径一メートル二〇センチの地球儀を使って説明する。

#### 〈自分たちの今の生活と重ねながら考える〉

国語で、主人公のケンジたちが、疎開生活でいつもおなかがすいていたことを表す場面が出てきた。社会科でも疎開学童の食生活に絞って、自分たちの食生活と重ね合わせて考えていくことで、学級の生徒たちも「戦争中の生活」の一端に思いを馳せられるのではないかと考えた。

④一月二〇日⑦二月五日 学童疎開の食事メニューと量載せた資料を見、自分たちの今の食生活と比較する。

またT「大根おろしてどんなふうにする?」S「さんまにつける。」「なめこと……。」「てんぷらのつゆに……。」と出てきたところで、学童疎開の体験文を読み、「ふだんの食事は、丼鉢半分の大根おろしと小皿にちよっとのご飯」というところで現物を出すと、「えーっ!?!」と大きな声があがる。

国語の授業と合わせて、生徒は「どうも本当にいつもおなかをすかせていたらしい」と感じていっている。

#### 〈冬休み中に「戦争の頃のこと」を聞いてみよう〉

この時点では生徒は戦争中のことを考える時に、自分たちと比較的年齢の近い、物語のなかのケンジを媒介している。今度は、冬休みに祖父母に会う機会もあるだろうということ

で、自分の身近な人の戦争体験を聞いて、もう少し戦争を「現実にあったもの」としてつかめるのではないかと考えた。

⑧二月一日 T「先週の金曜日は何月何日だった?」

「二月八日って何の日?」S「戦争に関係ある。五〇何年前って言ってた。(一人だけ)というやりとりの後、新聞を見せ、二月八日に催しがあったことを話す(それにしても戦後五〇年というのに小さな記事しか載っていない)。

一九四五年二月八日の「大本営陸海軍部の臨時ニュース」を聞かせる。

年表(生徒の生まれた年から今までが紙テープで表してあるもの)を見て、一九四一〜四五年は生徒も担任二名も生まれておらず、一人の担任が二歳であることを確認。

改めて「いま勉強しているのは、みんなはまだ生まれていないけど、S先生が二歳の赤ちゃんの頃だ」ということを意識させようとした。

⑨二月一八日 冬休みの宿題(戦争中の生活の聞き取り)の説明と、インタビュアーの練習。

⑩一月一六日⑭一月三日 聞き取りしたことの発表。保護者にも学級通信で趣旨を説明し、協力をお願いしたこともあり、岩手県祖母に電話で聞いて返事がFAXで届いた。

という家もあった。また八丈島でもアメリカの人影を捨てさせられた、という報告があり、本当に全国津々浦々に戦争があったのだと感ぜられた。

また、聞き取りの相手がいないという生徒もいたので、校内の再雇用の先生に体験を話してもらった。実際に機銃掃射を受け、逃げるのに放り投げた上履きの袋に穴が空いた、という話には生徒も驚きを覚えたようだった。

#### 「聞き取りの内容」

##### ○食べ物のこと

・ 甘いお菓子が食べられない ・ 雑炊、さつまいも、大豆等が主食 ・ いものくき、こうりゃん等を麦と一緒に炊く

##### ○生活のこと

・ 電気を明るくしてはいけなかったので家のなかがいっぱい暗かった ・ 英語が使えない ・ アメリカの人影を捨てさせられた ・ 勤労動員 ・ 軍事工場 ・ 防空壕への避難 ・ 家が焼けた

##### ○軍隊

・ 海軍、潜水艦でフィリピン沿岸警備 ・ 海軍で船のなかでの生活 ・ 隣にいた人が撃たれて死んだ ・ 小学校に軍隊

へもしも、もしもだけ……隣の君が死んだら……

⑮二月二日⑯二月一九日 みんなから出た聞き取りの内容についてどんな感想を持つか話し合う。友だちが調べてき

取材メモ「戦争の頃の生活を聞いてみよう」
答えてくれた人(みけちゃん)
Q0「戦争の頃、何才(何年生)でしたか？」
2才
Q0「どこで生活していましたか？」(所属市)
こうじ町
Q0「どんな生活をしていましたか？」 (食事・学校・毎日の生活・空襲のことなど教えて下さい)
くらし生活はいい。 みけちゃんの家はいい。

取材メモ「戦争の頃の生活を聞いてみよう」
答えてくれた人( )
Q0「戦争の頃、何才(何年生)でしたか？」
12才 6年生
Q0「どこで生活していましたか？」(所属市)
東京都八丈島八丈町
Q0「どんな生活をしていましたか？」 (食事・学校・毎日の生活・空襲のことなど教えて下さい)
英語がつかえなかった。 アメリカ人の開くのをせられた。 甘い菓子が食べられなかった。 電気を日暮るころにはつけなかった。 家の中はいつもくらかった。

取材メモ「戦争の頃の生活を聞いてみよう」
答えてくれた人(おぼちゃん)
Q0「戦争の頃、何才(何年生)でしたか？」
22才
Q0「どこで生活していましたか？」(所属市)
岩手県胆沢郡水沢町 妻小路 社也
Q0「どんな生活をしていましたか？」 (食事・学校・毎日の生活・空襲のことなど教えて下さい)
食事は佳く欠け根の葉や大根の葉など ものを味づけるさつまいも、とうも ろこし、大豆等が主食。学校四年 生以上は勤労作業(草刈り)田舎生 活だった。毎日の生活金沢市小学校で 軍隊の部隊

取材メモ「戦争の頃の生活を聞いてみよう」
答えてくれた人( )
Q0「戦争の頃、何才(何年生)でしたか？」
18~19才
Q0「どこで生活していましたか？」(所属市)
Q0「どんな生活をしていましたか？」 (食事・学校・毎日の生活・空襲のことなど教えて下さい)
海軍 列ピンえんがんけいび せんすいかん

取材メモ「戦争の頃の生活を聞いてみよう」
答えてくれた人( )
Q0「戦争の頃、何才(何年生)でしたか？」
19才
Q0「どこで生活していましたか？」(所属市)
兵庫けん川西市
Q0「どんな生活をしていましたか？」 (食事・学校・毎日の生活・空襲のことなど教えて下さい)
ぐんじこうじで こうきのふじんをつくら いました。

たものは身近に感じるのか、自分のことに引きつけての感想が多く出てきた(ただこの時期、北海道のトンネル事故があってその話になったり、風邪が流行って全員がそろわないので授業を進められなかったりと、実際にこのことについて授業をしている時間は短い)。

「感想の内容」

・「隣の人が撃たれて死んだ」に対して「もしも、もしもだけど…自分の隣の人が死んだらと思うと…」。例えばだけでなく、隣の1君が死んだら、親友だから…。」と、一生懸命にことばを選び、まさに自分のことに置き換えての発言。  
・「家のなか暗いって言うのはいやだ。」「トイレも電気な

いのかなあ？」

・勤労動員について「草刈りは今は機械だからいいけど、昔は手でやってたと思うから大変だったと思う…。」  
・また「甘いものが食べられないというのはさびしい。」「甘いものが食べられなかったって生きていけるじゃん。だってご飯が食べられるんだから。」というやりとりがあり、教員としては「あれれ、いままでの学習は何だったの?」という思いになってしまふのだが、気を取り直し、「いまの意見どう思う?」と聞く。すると「甘い物食べると、ご飯食べられなくなる。」「虫菌になる。」という答え。「ウン」と唸りたくなるところで「ご飯が食べられるんだから。」と言った本人が「あっ、ご飯満足に食べられないんだ。」と気がつき、一件落着。

「戦争ってどんなもの?」

三年生の卒業も間近となり、授業も残り少なくなってきたので、この単元もまともに向かわねばならない。しかし、戦争中の生活についていろいろ考えさせてきたものの、ここへきていったいどのようなまとめ方をすればいいのか、行き詰まってしまった。「ともかく始めてみよう」と考えた計画性のなさが一番の原因なのだが…。この時点で生徒が「戦争」についてどう考えているのかを聞こうと思った。

①9二月二十六日②三月四日「ところで、戦争ってどんなもの?」と問い、それぞれの考えについて話し合う。すると

大きく三つのグループに分かれた。

・「かわいそう」グループ(三人)……人が死んだり、家が焼けたりするのがかわいそう。

・「国と国」グループ(四人)……国と国が違う。勝った方が相手の食糧などを奪い取る。

・「その他」グループ(四人)……いろいろな武器がある等、戦争に付随することを述べた意見。

この話し合いのなかで、「かわいそう」という意見に対して「かわいそう」と言っても、戦争してんだから戦わなくっちゃ死んじゃう。例えばA君がいて弟が死んだら、その子の家族とか学校の先生とか身近な人たちはかわいそうだと思うけど、一生懸命戦争をやってんだから少しの犠牲はしょうがない。」という意見を述べた生徒がいた。卒業を目前にして、自分の意見をまとめ、きちんと発言できるようにしたことについては、担任として嬉しく思えたが、他の生徒に聞いても「戦争だから仕方がなかった」という意識がけっこうあるようで、世間の風潮とつながるものを感じた。

②三月一日 授業があと二時間となり、最後にきて担任の思いを強引に伝えるような展開になってしまった。

T「昨日は何の日だった？」に誰も答えられず、東京大空襲について簡単に説明。この日も新聞テレビの報道は少なかつたように思う。

「戦争だから仕方がなかった」を意識して、東京大空襲で

S「病気の時」「震災の時」「津波の時もそうだよ。」

S「あ、わかった。戦争の時だ！」

T「戦争の時、勉強できた？」

S「できなかった。」「日先生も言ってた。」「空襲でできなかった。」「疎開してたからできなかった。」「あの、僕が聞いたやつで、疎開してた時勤務作業があった。」「食べるのはできなかった。」「おなかすいてた。」と、次々に発言が出た。

T「戦争って何？」って聞いていろいろ考えてもらったけど、こういう「本当に当たり前のことができなかった」というのが戦争だということもできると思う。」と話す。

このやりとりの後、『あたらしい憲法のはなし』(いま六〇歳ちょっとの人が君たちと同じ中学生の時、勉強した本)の説明をし、「6. 戦争の放棄」を途中少し解説しながら読んだ。

④三月一日 『火垂るの墓』視聴。

#### (4) 学習を終えて

戦争についての学習を社会科で二五時間、並行して国語では「ランドセルをしょったじょうさん」を三二時間学習してきた。学習を終えて、国語と社会を関連させたことは良かったのではないかと思っている。国語の教材の時代背景を社会科で学習することで、『ランドセル……』の小学生たちがおなかをすかせていることがわかりやすかったり、また、社会科の学習をする時に、「ケンジ(『ランドセル……』の主人公)

「赤ん坊とともに黒こげになって倒れている母」「一面の焼け野が原」の写真を見せる。それぞれ「自分の家族だったら?」「自分の家だったら?」と話し、どの人にも家族や身近な人がいること、焼けた家一軒一軒が誰かの家だったこと等を話す。

#### 〈当たり前のこと〉ができないのが戦争

いよいよ最後の授業となり、この学級でのまとめとしては戦争というのは「子ども(人)が本来、当然できることとして保障されていることができない」状態であることとまとめることにした。

③三月三日 まとめ

T「ところで『子どもの仕事』って何だろう? これこれは子どもの仕事だっというようなもの。」と問いかける。

S「皿洗い」等のお手伝いが出てくる。

T「じゃあ、赤ちゃんの仕事って?」と問うと

S「ねる」「食べる」「おっぱい飲む」「遊ぶ」が出る。

T「そういうふうに見えるよ。『子どもの仕事』って何?」

S「学校で勉強する」「遊ぶ」「食べる」のAグループと「皿洗い」「ごみ捨て」「ふとんほし」のBグループに分かれるが、「保育園の子が皿洗いするか?」という意見も出て、強引にAグループの意見でまとめる。

T「こういう当たり前の『子どもの仕事』ができないことがあるんだけど、どんな時?」と問いかける。

もそうだった。」というふうに、ケンジをいわばその時代の代表人物として、いろいろなことを考えるきっかけにしたりもした。また、学童疎開から学習に入っていたのも、自分たちと年代の子どもたちがどんな生活をしていたか(とくに食事)というあたりで、考えやすかったのでは、と思う。

しかし「いのちの大切さ」「平和の尊さ」「戦争のむなしさ、愚かさ」を伝えたい、という思いはあっても、いざそれを「授業」で具体的にどう伝えるのか、どんな学習過程を通していけば子どもたちに伝わるのか、ということになると、いまの自分にとってはわからない難しいところが多すぎた、というのが正直なところである。「いのちって……なんだよ」「平和とは……」「戦争って……」と、どの一つをとっても自分自身が端的に言える言葉を持っていない。ただ、それぞれについて、ただ一つの言葉が決まっているわけではもちろんないし、子どもたちは今回の一連の社会と国語の学習をしたことで、少なくとも戦争や平和についての認識が新たになったのは間違いないと思っている。これからの生活のなかで、戦争にかかわるニュースを見たり、学習をしたりという機会があった時に、今回の学習が自分の考えを持つ下地になってくれればと思う。

(やました ようじ・東京都八王子市立宮上中学校)